



中高生とともに差別と闘う

『桜舞うスタートライン』

吉成タダシ (うずしおブランチャ代表)



散り、舞う、季節

桜の花びらが散りはじめました。吹く風に、どこからともなく現れる花びらの舞。知らぬ間に笑顔がこぼれます。散る花びら、舞う花びら。別れと、出会い。この季節に卒業と入学があることは、もはや私たちのDNAに刻まれているのかもしれない。

この春、これまで八年間勤めた学校を離れ、新しい学校に赴任することになりました。子どもたちには、記憶でしょうが、私たちにすれば、凝縮した時間が積み重なった長い年月の記憶です。感慨もひとしおの春です。

この季節になると思い出す出来事がいくつかあります。新型コロナ禍の折のことでした。いつも通りの卒業式はできず、縮小した形で何とか執り行われた感動の卒業式。そんな感動や感傷に浸っていた三月。思いがけない出来事に遭遇し、悄然とうなだれた記憶があります。

新しく迎える新中学一年生のなかでも、特別な支援を要する子どもには、希望すれば入学前に面談を実施します。それは、安心して入学を迎えてもらうためであり、学校としてどのような点に留意して入学を迎えればいいのか、準備や心づもりをするためのものです。

父母との面談

その中に一人、妙に違和感を覚える子どもがいました。小学校の先生から申し送りを受けた時も、ど

こか釈然としませんでした。

面談希望の電話がかかってきたとき、お母さんはこうおっしゃられました。「六年生の時、児童相談所に保護されたことをきっかけに籍を祖父に移し、今は一緒に暮らしていません」と。「ならば、おじいさんの方に連絡をしましょうか」と聞くと、「すべてお話ししておきたい」とおっしゃるので、まずご両親だけ面談をすることにしました。それはどこか奥歯に物が挟まったような電話でした。

後日、面談に来られたご両親は、保護された経緯や、虐待を疑われたこと。子どもが四歳の時に今の父親と再婚をしたこと。父親はカウンセラーの仕事をしていること。子育てに熱心だったこと。子どもは虚言癖や盗癖があることなどをお話しされました。そして今、おじいさんからは、「自分の手には負えないから引き取れないか」と言ってきたことに對し、「一度引き受けたのだから最後まで面倒を見るように」と言葉を返したと。「以前からおじいさんとは折り合いが悪い」ともお父さんはおっしゃられました。

一時間を超える長い面談となりましたが、それどころか釈然とせず、やはり鬱々としています。すべて本当のことか、どこまで本当のことか。

おじいさんに電話連絡をし、二日後に子ども本人にも来てもらい、面談を実施することにしました。その間も幾度となくご両親から念入りの電話連絡が入り、「どうぞよろ

しくお願いします」と、お願いを受けます。それもまた、私の中で引つかる要因でした。

桜舞うスタートライン

おじいさんと本人が面談に来られました。おじいさんは、ごくごく普通のおじいさん。本人はおとなしく利発そうな幼い感じの子でもあります。

おじいさんからも、保護された経緯、虐待があったことを聞かせていただくのですが、それは父親への激しい非難で溢れます。娘である母親は、今の父親と出会って変わったしまった。それは他のきょうだいにとっても同じ思いだ。父親はカウンセラーと言いつつも、占いのようなことをしている「ヒモ」のような存在だと。とにかく、父親に対する非難のオンパレードでした。

どこまでが本当のことなのか、どうしてここまで非難するのか。再婚のときにいったい何があったのか。それを隣でいる子どもはいつたいどんな思いで聞かされているのか。謎が謎を生んでいるような感覚でしたが、話の途中でそれが弾けました。

「あの父親は〇〇の地区の出身で、ブラクなんです」

えっ！ 目を見張りました。そういうことか！ 引つかかっていたものの多くが一気に抜け落ちたような感覚です。おじいさんは続けます。

「近所の昔の人でまだ言う人もいますけど、うちは言わないけど。こん

なことは言ったらアカンから……」そう言いつつ、父親の親戚の素性までしっかり調べあげていました。周囲の人の差別性は問いつつも、自らの差別性は棚に上げたままです。

「お父さんの問題と地区出身であることは分けて考えないといけませんよね」

と一言言うと、おじいさんは、剥き出しにしていた棘をスーッと引っ込めました。でも、話がこじれた発端の一つに、部落問題が大きく関わっていることは明らかでした。

一時間ほどの面談となりました。その日の夕方、私はあらためておじいさんに電話をかけます。

「出しやばったことを言うようで申し訳ありませんが、子どもの前でご両親のことをこれ以上悪く言わないでください。言えと言っただけねじ曲がってしまいそうで。そうならないためにも、これ以上子どもの前では言わないようにしたいだけませんか」

それには、快く応じてもらえましたが、それもその場だけかどうかは分かりません。

この子の人生はこれからです。ですが、もうすでにスタートラインを大きく後退しているように思われます。学校として何ができるのか、どこまでできるのか。暗澹たる気持ちの春でした。そんな彼ももう高校生。三年間のかかわりが、彼のその後の人生の支えにどれだけなれたのか。風に舞う桜の花びらを眺め想います。